

ご挨拶

双松会 会長 金津 任紀 (16期)



桜花爛漫と咲き誇り春たけなわとなりました。近畿双松会の皆さまには、お元気にお過ごしのこととお喜びを申し上げます。平素は、何かとご高配を賜り厚く御礼申し上げます。一昨年から全世界で猛威をふるい日常生活や社会経済活動に大きな混乱をもたらしている新型コロナウイルスは、本原稿を執筆中の現在もオミクロン株による第6波の最中であります。本稿が皆さまに読まれる頃には、何とか落ち着いて元の日常が少しずつでも戻っていることを願うものであります。皆さまには長い間失礼しておりますので、本来ならば久しぶりにそちらへお伺いし、近況を語り合いたいところですが、事情ご賢察の上、お許しをいただきたく存じます。

母校松江北高は、昨年学校創立145周年を迎え、11月に規模を大幅に縮小しオンライン参加も交えながら記念式典を開催しました。記念事業の実施にあたり多くのご支援ご協力を賜りましたことにつきまして、本稿をお借りし厚く御礼申し上げます。約一世紀半の長きにわたって先輩諸氏のご努力によってつくられた伝統と歴史を糧に、母校のさらなる発展を祈る次第であります。

さて、近畿双松会はこれまで多岐にわたる事業を通じて会員の親睦と融和をはかれ会員同士の結束と一体感を強固にされてきたことに対しまして深く敬意を表します。それだけに、すべてに三密を避けることが求められる今の世情においては、悶々とした気持ちで事業の運営に苦慮されていることと推察いたします。

私も今まで出来ていたことが出来ない状況の中で、いかに生きるべきか自問自答を続ける毎日ですが、結局たどり着くところは、心の持ちようだとつくづく感じています。人生に起こるあらゆる出来事ありのままに受け入れ、感謝の心を抱きつつ日々ベストを尽くして精一杯生きる「陽転思考」こそが人間力を高めることにつながるのではないかと考えるからです。厳しい時勢ではありますが、どうか自己肯定感をもって前向きに生きていきましょう。コロナ禍で「あれもできない、これもできない」と委縮するばかりではなく「何ができるのか」を考え、自分なりの幸せや生きがいを見つける機会にしたいものです。

ご承知のとおり、コロナ禍をきっかけに人とのつきあい方が見直されてきました。ひと昔前までは「飲みニケーション」は同僚と親交を深め、本音が聞ける絶好の機会だったわけですが、最近の調査結果では若い人のみならず「不要」だと思っている人が多くなっているようです。様々な交流の機会を通じ同士の絆を育んで来られた皆さんの中にも寂しいと感じている人も多いことでしょう。

私も思いは同じですが、ふと気づくと、飲み会に限らずいろいろな行事が行われなくなっても困っていない、支障はない、今までは一体何だったのか、ということは結構あります。それなら、これからも今のやり方でいいのではないかと、という意見も当然あります。しかし、仕事や生活には大きな問題はなくても、やはり我々は「心をもった人間」です。表面的な形だけの関係ではなく、人の縁や絆を大切にする生き方をしたいと思えます。人と人を遠ざけるこの厄介な病気は、人間関係が希薄化しつつある現代社会において、一層心の豊かさや充実感をむしろ損んでいます。そんな世の中だからこそ、今必要なことは「よ

り多く」「より大きく」という価値観ではない、人間らしい「幸せ」を生み出すことではないでしょうか。

双松会は同窓の絆を大切に母校の発展に貢献していく親睦・支援団体として、会員の心の糸をつなぐ役割を今後とも果たしていきたいと考えています。今は、じっと耐えコロナ禍の終息を待ち、そして、皆さまとの再会を楽しみにしたいと思います。皆さまにおかれましては、くれぐれもご自愛いただきますようお願いいたします。

おわりに、近畿双松会の益々のご発展、並びに会員の皆さまのご健勝ご活躍をお祈りし、ご挨拶とさせていただきます。